



## 知的生産の技術

梅棹忠夫著

岩波書店 1969（岩波新書）

文学部教授 野口 武悟

新入生のみなさんのなかには、大学に入学して、高校までの学校生活との違いに戸惑っている人も少なくないだろう。例えば、授業。高校までは、どの科目にも決まった教科書があって、先生はそれを使って授業をする。つまり、教科書に収められている基礎的な「知識」を吸収することが高校までの勉強であった。

ところが、大学の授業では、決まった教科書というものの存在しない科目が多い。それは、大学自体が「知識」を生み出す現場であり、学問の最前線に位置していることと深く関わっている。生み出された新たな「知識」を授業で扱うことが多く、1冊の決まった教科書を定めることが難しいのである。

では、大学ではどうやって勉強したらよいのだろうか。たいていの先生は、授業の中で、参考になる文献（図書や雑誌論文）をいくつも紹介してくれるはずである。それらを聴き流さずに、積極的に読むことである。専修大学には、約176万冊という全国屈指の蔵書規模を誇る図書館があり、必ずやみなさんの勉強の支えとなるだろう。

民族学者・梅棹忠夫（1920-2010）は、「うけ身では学問はできない。学問は自分がするものであって、だ

れかにおしえてもらうものではない」と『知的生産の技術』のなかで述べている。この『知的生産の技術』は、大学における勉強の方法や技術などをまとめたもので、今でいうところの「アカデミックスキル」本の嚆矢ともいえる存在である。この本が出版されたのは、今から45年も前の1969年のことだから、もはや古典（クラシック）といってもよいだろう。

今日では、新入生のみなさんに配布された『知のツールボックス（改訂版第5刷）』（専修大学出版企画委員会編、専修大学出版局、2013年）など、良質な「アカデミックスキル」本も数多く出版されている。そうしたなかで、あえて『知的生産の技術』を取り上げたのは、この本が大学における勉強や「アカデミックスキル」の核心を的確に捉え、分かりやすく説明しているからである。梅棹の述べる核心は、45年経った今もまったく色褪せていない。ただし、この本に紹介されている方法や技術などはコンピュータ普及以前の時代のものであるから、今日において必ずしも実用的とは言い難い。したがって、『知的生産の技術』（理論）と『知のツールボックス』など各種の「アカデミックスキル」本（実用）を組み合わせ読み、活用することをお勧めする。